

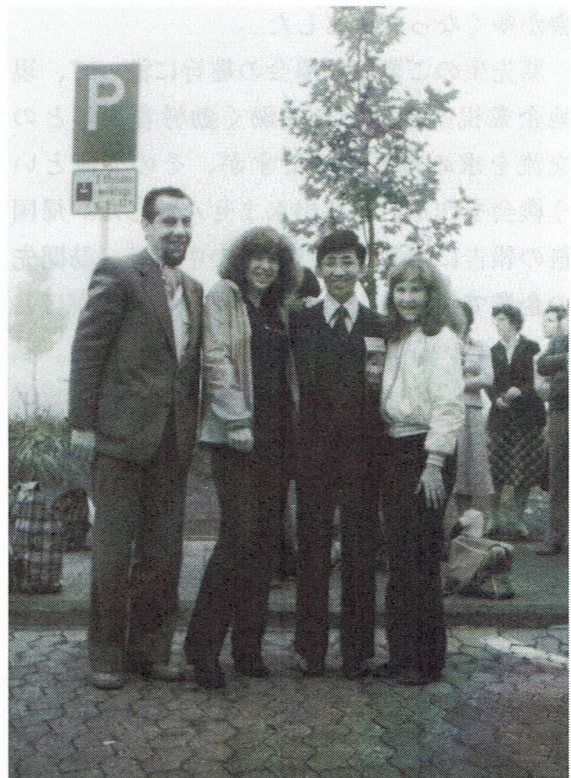
協会設立40周年に寄せて

(茨城県)
第9回（昭和53年度）副団長 篠崎裕司

あれから30年……、お笑い芸人の言葉ではありませんが本当にそんなに長い時が流れたのだろうか、と思うほど私にとっては海外派遣団の一員として経験したことが、ほんの数年前の出来事として脳裏によみがえってきます。

それまでの私は自営業という環境の中で、多人数で旅を共にするということが全くなかったので、結団式に臨んだ時はとても緊張しました。しかし、この派遣団への参加が私のその後の人生に大きな影響を与えることになりました。協会のおかげで全国に友達の輪が広がり、また、旅行を通して仲間作りやポジティブな発想を持つことの重要性など、多くの収穫を得ることが出来たのです。

中野サンプラザでの結団式で初めて原健三郎先生にお目にかかり、その後二十数年にわたりご厚誼をいただきましたが、全国大会に参加するたびに海外の2週間の旅や仲間とのふれあいの思い出にひたるとともに、折にふれ原先生の語る郷土や国家を思う情熱あふれる言葉に接し深く感動したものでした。現在私は、地元で地域の活性化を目的とした3セク街づくり会社の代表を務めておりますが、これも在りし日の原先生のご薫陶が非常に大きく影響していると感じております。



ドイツ バトホルブルクでホームステイの家族と

原 健三郎前会長と 協会の勤労青少年海外派遣事業の思い出

株式会社リバティ・インターナショナル
国際治療教育研究所 (東京都)
代表取締役 藤井則之

私が当協会事業の一環として計画された勤労青少年海外派遣事業に囚らずもかかわらせていただくようになりましたのは、昭和46年度の第2回勤労青少年欧州親善派遣団からでありました。翌47年からは米国への派遣の機会が多くなってきました。

原先生のご要請は協会の趣旨に沿って、現地企業視察の際そこで働く勤労青少年との交流を求められたのですが、その交流という機会を作ることは出来ませんでした。帰国後の報告に記載されたことの中には、訪問先の企業で働く青少年と話す交流の機会がほしかったというコメントが目につきました。私は、米国に留学中夏休みにシカゴ郊外の貨物列車を作る工場でアルバイトを3箇月間したときに労働者は使う機械により時間給が異なり、現場監督 (Foreman) が一時間ごとに各労働者のそれぞれ異なる時間給をつけて回っていることが日本とは全く違うのだということを目の当たりにしたことを思い出しました。ということは、例え日本から勤労青少年親善派遣団が見学に来たからと言っても、働く手を休めて、日本の派遣団員と話すことは現場監督の許可を得てからでないと勝手な行動はとれないだけでなく、働いていない時間は給料をもらえないということなのでした。そして時間給の良い機械は、他の労働者にとって代わられてしまうのです。そのため交流の機会を作ることがほとんど不可能に近いということになるわけです。

私は、カンザス州ウイチタ州立大学に留学中の連休中に同州のアッシュランドという小さな田舎町に、他の留学生と一緒に招待され、そこに二泊三日のホームステイをする機会がありました。地元の人々の温かい歓迎の行事も楽しむことができました。これこそが国際交流であり、すべての住民は働いたこともあり、また、現役で働いている家族もいたのです。そこで、人口僅か千数百人のアッシュランドの町役場に連絡し、日本から勤労青少年親善派遣団30余人のホームステイと町民との交流や牧場や産業視察を提案いたしましたところすぐ承諾され訪問が実現しました。町を挙げての歓迎ムードの親善交流が実現できたことが大変好評でした。

それからは毎年小さい町を次々にアメリカの知人・友人を通じて紹介してもらうことにしました。その中で最も熱心に協力して下さった弁護士さんが、オハイオ州セントメリーズ市のバレット・G・ケンプ氏でした。人口わずか8千人余りのコミュニティーですが、市をあげて第1回目は当時のセル市長さんとケンプさん他有力者の協力でホームステイの実現のみでなく、工場ほか市役所や消防署・警察署・ロータリークラブ・ミュージアム・市内見学・夕食会による市を挙げての歓迎会では親善派遣団員全員に「名誉市民の称号と市の鍵」まで下さるようになり、その後、何度か親善派遣団が同市にホームステイする機会が実現できました。

また、ケンプさんの紹介でアラバマ州アニントン市でのホームステイと企業視察、夕食会での親善交流、また私のニューヨーク市で働いておりました時代のアシスタントの生まれ故郷であるアイダホ州ウォレス市も2回ホームステイと公式行事企業訪問をお願いし実現しました。また、私が留学しておりましたときのルームメートの紹介でカンザス州リンズボーク市他それぞれ皆紹介で親善交流のため小都市を選んで各市の支援でホームステイプログラムを実施しました。

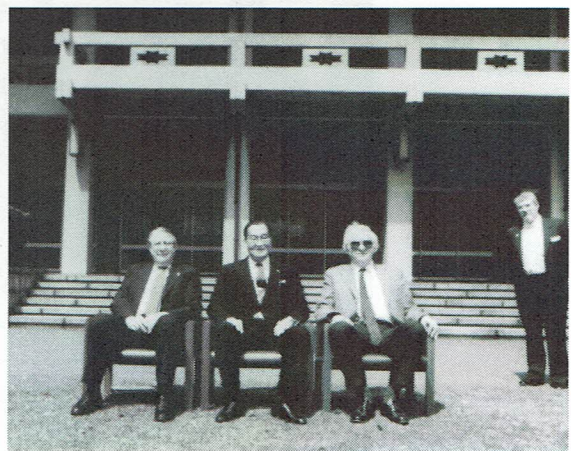
毎回必ず感激的なことは、ホームステイが終わりいよいよお別れの時が来ますと、出発のバスに団員が乗ってもらうのに30分以上別れを惜しみ家族と抱き合って泣いている人たちに出発を促すことが難事の中の難事であったことでした。今は故人となられ心の広い人情あふれた国際人原健三郎先生のご指示を仰ぎながら、長年にわたり勤労青少年協会の事業に携わられましたことを大きな名誉と誇りに感じている次第です。

特記したいことは、原先生的一声で兵庫県淡路島の当時の北淡町（現在五町合併により淡路市になっております。）故長筋茂町長に私の目の前で協会事務局を担当されていた山根さんに電話を入れろとご指示なされ、早速セントメリース市と姉妹都市の締結を町議会にかけるように長筋町長にお伝えになられ、私にケンプ氏に直ちに連絡し現地の市議会に同様の動議を出すようにとのご指示を頂き、連絡したところ直ちに動議は市の承認を全会一致で可決され両町・市の姉妹都市締結が僅か四箇月で実現を見ることになりました。即断即決の国際人でもある原先生は長い先を見て青少年のため北淡町から始まる淡路島全島民の将来のため国際友好の事業を実現されたのだと思います。

神戸大地震の時は、震源地となった北淡町のためセントメリース市のセル市長は、直ち

に非常事態宣言を出され、北淡町の亡くなられた39人の方々のため市内のルーテル協会でも市民の方々がご冥福をお祈りになられ、国際交流センターで39本の蠟燭に火をともしてここにおいても亡くなられた方のご冥福をお祈り下さったとのことでした。それから北淡町支援の募金が始まりまもなく私どもリバティ・インターナショナルに5回にわたって支援金が送金されてまいりました。その額は当時1ドル約90円台の円高にもかかわらず、総額、日本円にして250万円を超えました。しかもその中には小学生たちからも浄財の支援金が含まれていたのです。そして、すべて5回にわたり銀行を通じて北淡町役場に送金されました。すばらしい姉妹都市としてのセントメリース市の友情を感じざるを得ません。

決断力をお持ちだった偉大な国際人の政治家・原健三郎先生と当時の労働省年少労働課のご協力なくしてはこの事業もなかったことでしょう。ご自身の若きころのオレゴン大学留学経験を若い勤労青少年に少しでも分かちたいという思いがおありになったのではないのでしょうか、今は故人となられた原先生ご夫妻のご冥福を心よりお祈り申し上げご報告の一端とさせていただきます。



原先生を中央に、衆議院議長公邸中庭にて

「継続は力なり」

(茨城県)

第3回(昭和47年度)団員 田中博美

還暦を迎える年齢になって青少年という言葉の響きを聞くと、何か気恥ずかしさを感じるのは私一人だけでしょうか。

今からさかのぼること三十数年前の昭和47年に、財団法人勤労青少年協会主催「第3回日米親善技術交歓派遣団」に多くの方々の援助をいただき、当時は海外旅行などに行く機会などほとんどない時代に米国の企業見学、原会長の母校・オレゴン大学の訪問などの貴重な経験をさせていただきました。

そのことは三十数年たった今でも色あせることなく鮮明によみがえってきます。

原会長は、折に触れ「継続は力なり」と言われ、取り巻く環境が厳しくても海外派遣事業を永く続けてこられました。

私自身仕事以外に継続して何ができるのかと考えたとき、派遣団員の一員として勤労青少年協会の主催する全国大会行事には必ず参加しようと決意し、ハラケン山荘で開催された第一回大会から一度も欠かすことなく参加して参りました。

これが私にとっての「継続は力なり」かもしれません。



交歓全国大会(平成19年京都にて)・全国大会は皆勤です。

またも苦しみ続けるのか第二の人生

(埼玉県)

第4回(昭和48年度)団員 堀口長治

一昨年36年勤務した会社を定年退職、関連会社への誘いも断り悠々自適の生活が始まった。退職前からやることは色々考えてあった、自然再生事業への参加、自然保護活動、花火の研究などに加え、趣味の岩魚釣り、蕎麦打ち、陶芸、野菜作り。みんな定年後を視野に入れて10年以上前から始めたものだった。1日1テーマに取り組むことに決めて1箇月のスケジュールを立てて生活していこう、これが定年時の予定だった。この計画は残念ながら1年持たなかった。そして今、相変わらずサラリーマン時代と同じ電力事業の中で仕事をしている。

それで自然再生事業への参加や花火の研究さらに趣味の諸々を止めてしまったのかというとすべて続けている。限られた時間を調整してなんとか辻褃合わせをしている、これではサラリーマン時代となんら変わらない。む

しろサラリーマン時代のほうが中身が濃かった、現在は手出ししているものが増え従って中身が薄くなっている。花火に限っていえば調査に行く時間がとれず、手持ち資料の精査のみ実施している有様である。

昨年1月から始めた仕事をあと1年くらいで軌道に載せ、その時こそ花火の研究を完成させ、さらに50cmオーバーの岩魚を釣り上げ、そして満足できる土器を焼き上げることに熱中したい。

手出しするものが多すぎると友人たちは言う、しかし数も力である。このように始めたら続けるようになった切っ掛けは36年前の原先生の一言「継続は力なり」との言葉を聴いてからだ。その続けることのなんと大変なことか、しかし続けたがために味わえる一時の喜び、これが何とも云えないのだ。だからこれからの人生も忙しい日々を送り続ける。



花火研究資料



自然保護活動中に私が発見したオオタカと営巣木。巣立ち直前のヒナです。



桶川地域文化研究会による縄文野焼き風景



私の作品

私の青春時代

(茨城県)

第4回（昭和48年度）団員 渡辺久代

あまりに遠くなった記憶を一コマずつ、硬直している脳内を活性化するべく息を吹きかけてひも解いている次第です。

昭和47年、初めて青少年ホームに足を運ぶきっかけになったのは、たまたま市の広報で見た笠間の陶芸教室の募集でした。短大を卒業し、家業を継ぐべく淡々とした毎日を送っていた中、少しかじったことのある陶芸にちょっぴり引かれたからです。これをきっかけに夜のホームへといそいそと通い詰める日々でした。そこには遠く故郷を離れ、会社の寮生活を送っていた人、家業を手伝う人、趣味のギターに興じる者、卓球や社交ダンスに汗流す人たち、実に多くの仲間たちがそこに集い、職員の方が作って下さったカレーやおでんをいただきながら、会社のことや時には恋愛論などを語り合い涙を流し、夜のひとときを過ごしました。私にとっては実に居心地のいい空間にどっぷりと漬かっていました。とかく現代の若者たちは人付き合いが苦手と言われますが、パソコンもメールも携帯もない時代、共に語り合うことで明日への活力を見いだしていたのです。

最近の経済不安定の時代と違い高度成長の真ただ中、企業も活気がありましたし、働く次世代の若者たちに、と多くのご支援もいただきました。勤労青少年協会主催のオセアニア派遣団への参加も含め大変いい青春時代を送ることが出来ましたことは本当に感謝の念に耐えません。

今、私は古河市の観光ボランティアガイドをやっています。低迷している古河の街にかつての古河の賑わいを願いつつ何かしら私に出来るささやかなボランティア活動として街づくりに参加しています。観光バスの押し寄せる観光スポットではなく、何かしら温もりのあるそんな「ふるさと案内人」としておもてなしが出来たらと思っています。機会がありましたら是非、お立ち寄り下さいませ。



ハラケン山荘において記念植樹

敬愛する原 健三郎先生の思い出

(大阪府)

第4回(昭和48年度)団員 宮澤年典

第5回(昭和49年度)団員 宮澤妙子

(財)勤労青少年協会40周年おめでとうございます。

今は亡き原健三郎先生、万悌子奥様を思い出す時、不思議な温かさにつつまれ、懐かしく、感謝の気持ちでいっぱいになってまいります。私は3年間、先生御夫妻のお側で家族同様に共に暮らせていただき、結婚してからもずーと導いていただきました。

主人は昭和48年オセアニア派遣団員としてオーストラリア、ニュージーランドへ、私は49年カナダ、アメリカ、メキシコ派遣団員として参加し、これが縁で昭和51年結婚いたしました。団員同志の結婚は2番目だと聞いています。先生御夫妻が仲人をしてくださり、式当日時間が迫っているのに先生の姿はなく奥様はじめ私たちがハラハラしているのに『散髪に行っていた』と30分遅刻して到着され、奥様に叱られて可哀想に小さくなっていらっしゃった先生。

私たちの新居が埼玉、坂戸では遠すぎると心配していただき、犬と散歩しながら見つけてくださったアパートは先生の御自宅から徒歩10分のところでした。時々、我家に愛犬(ブルドック)を連れて訪れては、奥様に隠れて『たばこ』を吸っていらっしゃいました。

また、私が財団で工作中、隣の部屋で原稿を書いていらっしゃり、あまり静かなので部屋を覗いてみると、耳の穴に鉛筆を突き刺して居眠りしていらっしゃったお姿にびっくりしたこと。

御自宅で一緒に時代劇を見ていて、さほど悲しい場面でないのに先生は隠れて涙をごまかしていらっしゃった後姿。

いつでも、何処でも大きな手をバーンと合わせて感謝、感謝と合掌されていたお姿等々、思い出はつきません。おちゃめで、やさしく、寛大で、愛情一杯の先生が大好きでした。

先生がよくおっしゃっておられた『継続は力なり』を今日まで受け継いでこられた現原会長、事務局の皆様には敬意を表し、協会のさらなる御発展を心からお祈り申し上げます。

(妙子記)



原先生御夫妻の媒酌による結婚披露宴